

中友會 通信

vol.10 2026.3

揮毫 福田康夫 元内閣総理大臣、中友会最高顧問



DuanPress

日本僑報社 発行

問い合わせ先 中友会事務局

豊島区西池袋3-17-15 湖南会館

Tel : 03-5956-2808

Mail : zyh@duan.jp



日中関係における青少年交流の重要性

—— 宮本雄二元駐中国大使インタビュー ——



2026年3月、第21回「中国人の日本語作文コンクール」で最優秀賞（日本大使賞）を受賞した朱恒宇さん（大連外国語大学3年）が日中友好会館にて宮本雄二元駐中国大使、小川正史理事長を表彰訪問した。（撮影：段躍中）

先日、「中国人日本語作文コンクール」の受賞者とともに、宮本雄二先生を訪問いたしました。宮本先生は元駐中国日本大使であり、現在は公益財団法人日中友好会館の会長を務めるほか、日本アジア共同体文化協力機構（JACCCO）理事長や国際儒学連合会の副会長なども兼任されています。

宮本先生は大使退任後、文化活動や青少年交流を通じて日中両国の相互理解を促進することの重要性を唱えています。

Q 宮本先生は現在の日中関係についてどのようにお考えですか。

A 日本国民も中国国民も、平和と繁栄を願い幸福になることを願っています。日中両国は一衣帯水の隣国であり、しかも大国同士です。平和で友好的な協力関係を築いていかなければ、平和も繁栄も築けませんし、幸福もなれません。戦争はしてはいけないということです。

かつて日本が中国を侵略し、戦争をしてしまいました。日中両国の、戦争を経験した世代の指導者は、日中不戦を誓い、平和で友好的な協力関係をつくることを日中共同声明と日中平和友好条約で約束しました。これは後世への彼らの遺言なのです。

その古い世代の指導者の多くはすでに亡くなりましたが、歴史が証明しているように、彼らの努力は価値のあるものであり、正しいことだったと思います。これからも進むべき正しい道を指し示していると確信しています。

最近、日中関係は再び厳しい状況にあります。日中の民間は、それでも努力を続けていかなければなりません。次の世代にもぜひこの活動に参加してもらいたいと思っています。

日中両国が平和で友好的な協力関係を早急に取り戻すことを強く願っています。それが両国にとってプラスです。ベストの選択だからです。日本は日中共同声明の約束をしっかりと守り、中国も客観的に日本の真実を眺めて欲しいと思います。中国が世界の、しかも東洋の価値観を持つ指導的大国となるためにも、世界に対し開かれた公正な姿勢を保つことが非常に重要だと思います。

Q 宮本先生は日中青少年交流についてどのようにお考えですか。

A 言い古された話しですが、私も日中両国の良好な関係の未来は、青少年にかかっていると思います。時代が変わり、社会が変われば考え方も変わります。両国の若者がお互いの文化を知り、相互理解を深め、敬意と信頼が生まれることで、新しい友好交流の仕方や方向を見つけることができるでしょう。若い人たちの交流は何があっても続けなければならないし、拡大し、強化していか

なければならぬということです。

私は毎年「中国人日本語作文コンクール」で受賞した学生たちに会うことができ、とても嬉しく思います。素晴らしい若者たちですね。この活動は日中両国の若者の交流を促進し、相互理解を深める非常に良い活動だと思います。私は大いに賛成しています。

青少年交流活動を通じて両国民の相互理解を促進していくという点で、段躍中先生と私は「同じ志」を持っています。つまり、日中関係をより良いものにし、相互理解を深めていくことです。ですから、私たちは「同志」なんです(笑)。

Q 宮本先生は日中両国の人的交流についてどのようにお考えですか。

A 日中関係をより良いものにするためには、人的交流をさらに深めていくことが最も重要だと考えています。日中両国は文化的にも多くの共通点があり、これは交流にとりとても有利です。

私自身、退官してから社会と接する時間が増えましたが、その中で改めて日中両国の文化的なつながりの深さを実感しています。長い歴史の中で積み重ねられてきた交流の成果ですね。大昔から日本は中国から漢字をはじめとする多くの文化を取り入れてきました。日本は経典が漢字で書かれた中国仏教を取り入れましたが、中国仏教はインド仏教と中国の儒教、道教の混ぜ合わせであり、中国文化の重要な一部です。遣隋使、遣唐使だけではなく、宋や明の時代にも、日本から禅に代表される新しい仏教を学びに行っています。そこで仏教だけではなく、あらゆる分野の書籍を大量に持ち帰り学習しました。多くの中国人の高僧や学者も日本にきています。中国は日本文化に刺激を与え続けたのです。

日本は中国の文化を受け入れるだけでなく、それを大切に保存してきました。中国から持ち帰った文物は今も数多く残っています。もしかすると、中国には優れた文物があまりにたくさんあったので大事にせず、残るのが少なかったのかもしれない(笑)。

日本は江戸時代までは中国から学び、明治以降は西洋から学んで、それを中国へ伝える役割を果たしました。明治の初めまで日本の知識人は中国と同じように6歳から中国の古典を学んでいましたが、彼らはこの漢学の素養を基礎に、西洋の新しいものを漢字で表わすことができました。だから中国の人も分かるのです。例えば『共産党宣言』は、ドイツ語から直接中国語に翻訳されたのではなく、日本語訳を経て中国に伝わりました。漢字で表わされた多くの新しい語彙が、中国人留学生を通じて

中国に渡ったのです。

1970年代の初め、初代中国駐日大使であった陳楚先生とお話したことがあります。陳大使は「現在の中国語は乱れている。日本に来て、その原因は和製漢語にあることが分かった」とおっしゃっていました。特に納得しておられなかったのは「場合」とか、「…化」とか「…性」といった言葉でした。今では中国語の中にかくさん見られますが、日本発だったのです。

日本は、特に戦後となりアメリカ文化の強い影響を受けて漢学を学ばなくなり、漢字を使って新しい言葉をつくれなくなりましたね。今では何でもカタカナです。しかし漢字で表した方が、意味がよりの確に伝わる場合があります。例えば、中国語の「電腦」は「コンピューター」のことであり、「代溝(沟)」は、「ジェネレーション・ギャップ」のことです。見ただけで「世代の溝」の意味が伝わってくるのではないですか。そろそろ再び中国の漢字表記の語彙を日本が取り入れる時代になったのかも知れませんよ。

Q 宮本先生から「中国人の日本語作文コンクール」および中国の若者に向けてメッセージをお願いします。

A 「中国人の日本語作文コンクール」は、開始以来22年間にわたり、一度も途切れることなく続けられてきました。主催者の皆さまは、さまざまな困難を乗り越えながらこの活動を継続してこられたのだと思います。そのご努力に対し、心から敬意を表したいと思います。

中国で日本語を学んでいる皆さんには、ぜひこれからも努力して勉強を続けてほしいと思います。日中関係には時として波風が立つこともありますが、長い歴史の流れの中で見れば、両国の友好交流と相互発展こそが主流であり、また不可欠なものだと言えるでしょう。

皆さんが将来、日中両国にとって有用な人材となり、両国の友好交流を支える架け橋となってくれることを心から期待しています。



2025年2月、第20回「中国人の日本語作文コンクール」の上位受賞者6名が表敬訪問。受賞者たちはコンクール20周年の感想を宮本先生に報告、感謝状を贈呈した。(撮影：段躍中)



中友会会員による
中国滞在体験談

私の中国物語

「私の中国物語」その①

中国建国七十周年と私の中国の思い出

元衆議院議員 海江田 万里



中国建国70周年記念式典が行われた天安門広場にて（海江田万里事務所提供）

中国建国70周年の記念すべき日に私は天安門広場に設けられたパレードの観覧席にいた。10年前の建国60周年の記念パレードを参観した私は、10年後の70周年にも北京を訪問し、再度、盛大なパレードを見ようとひそかに心に誓っていた。10年来の宿願が叶って私は、大いに満足するとともにその機会を与えてくれた中国の友人に心から感謝したい。

私が、60年、70年の中国建国の節目の祭典への参加にこだわるのは、私の生年も新中国建国と同じ1949年であるからだ。10年前の建国60周年は、「還暦」の歳で、今年は「古希」にあっていた。父親が付けてくれた名前が「万里」ということもあり、中国の70年の歴史は私自身の歴史と重なり合って、この日の感慨はひとしおであった。

私が、初めて中国を訪問したのは国交回復後3年目の1975年。その際、中国日本友好協会の廖承志会長、孫

平化秘書長（当時）とお目にかかり、日中友好の重要性についてお話を伺った。その後、私が政治家を志したのは、この時のお二人の話聞いて、日本と中国の友好関係を政治家として発展させたいと考えたことにも由る。この時は、もちろん毛沢東主席も周恩来総理も健在であった。

1976年9月の毛沢東主席の死後、「四人組」の問題を克服し、鄧小平総書記が党の指導権を確立した。中国の「改革開放」政策のスタートは1978年12月の中国共産党第十一期三中全会で、その後1992年に、中国の「社会主義市場経済」の理論が確立した。「社会主義市場経済」の理論は一言で表せば、土地などの所有は集団所有制を堅持し、使用（利用）権は市場で自由に取引が行われるものである。所有と使用を分離する考え方が、その後の中国経済の発展に大いに寄与したことは特筆すべきである。所有と使用が分離する考え方はシンガポールなどでも見られ、アジアでは歴史的にも認められた考えである。

その後の江沢民主席の時代に注目すべきは、鄧小平氏が路線を引いた香港の祖国復帰が実現したことであろう。

また、1997年にアジアを襲った経済危機を果敢な行動力で、乗り切ったことは正しく評価されるべきと考える。たしかに当時の、巨額の財政出動は、その後、中国の債務問題となって今日の中国経済に影を落としているが、あの時の、判断と行動が無ければ、アジアの経済危機はさらに長引き、日本の受ける影響もさらに深刻なものとなっていたことは容易に想像がつく。

私は1999年5月に、民主党の訪中団の一員として北京で江沢民主席とお目にかかった。氏は前年に訪日されたこともあり、会談は歴史認識について時間のほとんどが割かれ、私たちのために「前事不忘 后事之師 以史為鑒 開闢未来」の16文字を揮毫してくれた。この書は今でも私の手元にある。

胡錦濤主席の時代には私はいくつもの思い出がある。私は、1993年冬、国会議員になった直後に中国を訪問した際、中日友好協会の方から「この人は必ず将来の中国の最高指導者になるから会っておきなさい」と言われて、国務委員時代の氏に面会している。

胡錦濤主席は、「改革開放」政策が新たな時代に入った新たな指導者で、「和諧」を主張し、その親しみやすい人柄は、日本にも多くの胡錦濤ファンを生み出した。もちろん私もその一人であった。その後1998年に、日本の各政党が副主席であった氏を日本に招いた際に、私は民主党の接遇の担当者として、当時、自民党の接遇責任者であった安倍晋三総理と羽田飛行場のタラップの下で氏を迎えた記憶がある。胡錦濤氏は、その後、主席になってからも北京や東京でお目にかかるごとに、いつも温かい笑顔で接してくれたことが印象に残っている。

現在の習近平主席は次の主席と目されていた時から、腐敗の撲滅に主導的な役割をはたしてきた。経済発展と富裕層の腐敗は密接な関係があるが、共産党が国民の信頼と支持を受け続けるためには不断の腐敗との戦いが必要である。

また、「一帯一路」の大戦略は中国だけでなく、中国に連なるアジア・ユーラシアの国々にとっても発展の契機になる気宇壮大な構想である。最初は、この構想に否定的であった日本政府も、最近では、この構想に前向きになって、中国を含め、アジア・ユーラシアの国々とウイ

ン・ウインの関係を作る機運がもりあがっていることは歓迎すべきことである。

中国の経済発展は、習近平主席の時代にGDP規模がアメリカを抜いて世界一になることは現実視されている。AIなどの先端技術の発展は目覚ましく、現在の中国は「経済大国」というより「デジタル大国」との表現が適切であると考ええる。

10年後の建国80周年の記念式典も私は北京で参観したいと考えているが、年齢を考えると、それが実現するかどうかは分からない。人の命には限りがあっても、国の発展は政策が正しく、それを実行する勤勉な国民がいれば、永遠のものである。

海江田 万里（かいえだ ばんり）

衆議院議員、立憲民主党顧問、前衆議院決算行政監視委員長、元内閣府特命担当大臣（経済財政政策・科学技術政策）、元宇宙開発担当大臣、元経済産業大臣、元衆議院財務金融委員長、元衆議院経済産業委員長、元民主党代表。

1949年（昭和24年）東京都生まれ。慶應義塾大学法学部政治学科卒業後、金融、経済評論家の第一人者として、テレビ・ラジオ・新聞・雑誌などを舞台に、わかり易く税金や経済の解説を行う。中国通としても知られている。

1993年7月の第40回衆議院選挙に出馬、東京1区で当選、以降4回当選するも2005年衆議院選挙で惜敗。2009年8月第45回衆議院選挙にて国政復帰。2012年12月第46回衆議院選挙にて再選、2014年（平成26年）12月第47回衆議院選挙で惜敗。2017年（平成29年）10月第48回衆議院選挙にて国政復帰。

近年の主な著書は『人間万里塞翁馬』（双葉社）、『海江田ノート～原発との闘争176日の記録～』（講談社）、『2011年、あなたの「定年後（セカンドライフ）」は大丈夫か』（主婦と生活社）、『海江田万里の音読したい漢詩・漢文傑作選』（小学館）、『団塊漂流～団塊世代は逃げ切ったか』（角川書店）、『手にとるように税金がわかる本』（かんき出版）。

「私の中国物語」その②

本当の中国を求めて

会社員 宮坂 宗治郎

2009年、もう10年以上も前ですが、私は中国の北京に短期留学しました。たった1カ月だけの留学でしたが、私の中だけにある中国を知り、人生感も視野も広がってくれた貴重な時間だったので、記したいと思います。

留学前、私は中国という日本とは国土も人口も文化も異なる大国に興味がありました。といっても、それらは旅番組などのメディアから得たイメージとの比較でしかなかったもので、実際に中国に行き、中国の地を歩き、人と触れ合いたいと思ったのが始まりでした。一方、残念

ながら当時のメディアからは日中関係の悪い情報も流れていたことは事実です。しかし、中国人留学生の友人がいたこともあり、メディアの悪い情報から見える中国人と友人の中国人には乖離があるとも感じていたので、「本当の中国」がどうであるかを自分で行って、直接確かめたいという気持ちもあったのです。

留学が初めてだった私は少しの緊張感と大きな期待を持ち、北京へと降り立ちました。滞在先は、留学先であった北京大学のキャンパス内にある留学生寮でした。

留学生生活は平日の午前中から昼過ぎまで中国語の授業があり、中国人教師が日本語も英語も話すことなく、中国語のみの授業で、とても刺激的なものでした。それだけでも充実の日々だったのですが、平日の午後と休日は授業がなかったこともあり、外出しない日はありませんでした。

当時、北京大学に在学中の学生に友人が何人かいたので、留学することは事前に伝えていました。そのため、北京大学の友人と外出することが多く、天安門広場、景山公園、王府井にも一緒に行きました。さすが現地人だけあり、バスの乗り継ぎ、電車の最短、最安ルートを調べ、案内してくれました。印象的だったのは、景山公園でした。景山公園の階段を登り切り、景山公園の頂上にある万春亭から見た故宮と北京の街並みはどこまでも続いていて、日本とはまったく違う街の作りが、そこにはありました。歴史に現代を溶け込ませたような北京の街並みを見て、中国人は先代を重んじ、何千年という長い歴史に誇りを持っているのだと感じました。この場所に連れてきてくれた友人にはとても感謝の気持ちでいっぱいになり、中国の大きさと偉大さを感じた一日となりました。この日の北京は晴れていて、景山公園に吹いていた風はどこか心地の良いものでした。

別の日、大学側が企画してくれていた万里の長城を観光する日帰りツアーに参加しました。大学キャンパス内から大型バスに乗り、万里の長城へ行きましたが、道中、長いこと山を登って行くのがわかりました。万里の長城は突然現れ、大きさに圧倒されたことは今も心に残っています。

さっそく万里の長城の道へと上がると、前を見ても後ろを見ても、その道は遙か彼方まで続いていました。どちらに進むべきか悩みそうでしたが、観光向けの前方向に進むと、中々急な階段があり、段差にも大きなばらつきがあったので、当時の作りがそのまま残っていると感じました。進めるところまでの最終地点に着き、その先の道を眺めると、道はどこまでも広大な山々を上り下りしながら、ずっと先まで続いていました。しばらく見ていると、どこかへといざなわれそうで、不思議な感覚がありました。こんな延々と続く長い広大な道を遙か昔に作り上げた中国人は、やはりすごい。自然に逆らわず、山々の形状に沿って敷かれた道を見て、ここにも中国人の美的感覚がありました。

まだまだ記したい体験はたくさんありますが、これらの体験からだけでも私の中の「本当の中国」に十分答え

が出ました。

中国人は熱い魂を持っていて、先人を大切にしている、尊敬もしている、だからこそ昔の中国人が作ったものが世界に認められ、世界遺産になっているものも多い。そして、それらがしっかり今の中国人が作った街と共存しているのを見て、それが中国だと感じました。そんな先人を尊敬する中国人とそんな中国人が作った壮大な中国を私は尊敬します。

ちなみに、メディアの情報から見る中国人へのイメージの乖離ですが、留学中に行動を共にしてくれた中国人の仲間は皆、親切で日本も好きだと言ってくれる最高にすてきな仲間です。そして、彼らは中国人です。それが私にとっての中国人で答えになっていると思います。

あれからもう10年以上もの年月が経ってしまいましたが、今も中国と繋がりを続けています。日中友好のボランティア団体のスタッフとなり、イベント企画、運営、開催を行いながら、多くの中国人と日本人の交流をサポートしていますが、私自身も中国人の方々と多く交流させて頂き、日々楽しい時間を過ごさせてもらっています。

どうやら、私の出した「本当の中国」の答えに間違いはなかったようです。

宮坂 宗治郎 (みやさか しゅうじろう)

2008年3月、日中友好30周年記念日本大学生訪中団に選拔され、北京などを訪中。2008年7月、日中友好30周年記念中国大学生訪日団受入れ学生に選拔され、ホームステイに北京大学の学生受入れなどを行う。2009年2月、北京大学へ留学。2010年10月、上海万博大学生訪中団に選拔され、上海万博を訪中。現在は神奈川県日中友好協会チャイ華へ所属し、ボランティア活動に参加。

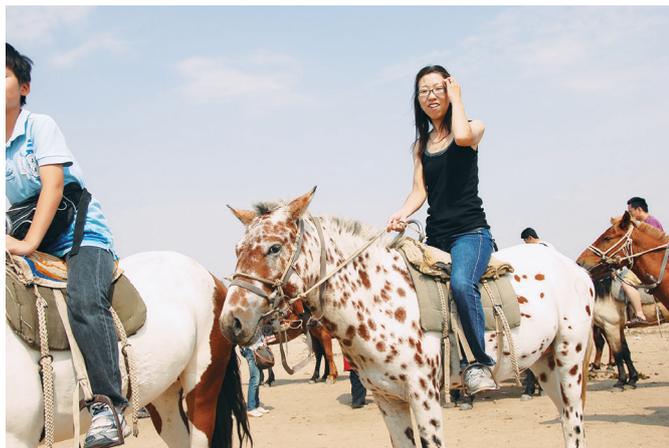


万里の長城にて

「私の中国物語」その③

命に国境はない

主婦 橘高子



家族で行った内モンゴルで。広々とした草原に圧倒されました

私は大学卒業後の1997年に中国北京に留学し、中国で働いていた日本人の主人との結婚を経て、2012年まで中国での生活を送ってきた。10年以上の生活の中では本当に様々なことがあり、洛陽への一人旅、各国の留学生との交流、香港返還、息子の現地幼稚園の入園、SARSの流行、北京オリンピックなど、思いつくままに挙げだしたらきりが無いが、やはり一番印象深いのは出産、特に次男の出産であろう。

1999年に長男を北京のとある病院で出産した時は外国人ということで「国際病棟」に入れてもらえた。そこでは広々とした個室が与えられ、食事も烏骨鶏のスープなど、高級食材を使用した産後メニューを部屋まで運んでもらえ、至れり尽くせりだったのでゆったりと産後を過ごすことができた上、看護師さんも日本語が堪能だったので多に安心感があった。部屋にもう一つベッドがあり、主人もそこに泊まり込むことができたので、初めての出産はなにもかも順調だった。その経験があったので、次男の妊娠が分かった時も、同じ病院、できるなら

長男の出産でもお世話になった中国人のベテラン先生にお願いしようと決めた。

病院でその先生に2度目の妊娠を報告したところ大変喜んでくれた。出産の時の入院の話になると、「前回の入院とは違って、一般病棟での出産しか受け入れられなくなった。看護師も日本語は話せないがそれでもいいか?」と言われた。すこし粘って国際病棟に入れてもらえるよう交渉したが「それが嫌なら他の病院へ行ってもらうしかない」とけんもほろろである。すこし迷ったが、「やはり同じ先生にみてもらいたい」ということと「中国語は留生活で身につけているのでなんとかなる。そもそも先生とも中国語でやりとりしているのだし」という若さゆえの自信と「中国の人と一緒に入院するなんてめったにできない経験かも」というちょっとした好奇心から「一般病棟で産みます!」と宣言し、中国の方と同じ条件で産むことに決めた。ちなみに、この先生は私の出産の直前に骨折され、最後まで見てもらうことはできなかった。

2002年の3月半ばのある夜、ついに陣痛が始まり、主人、長男と一緒にタクシーで病院へ。顔見知りの看護師さんが空いている病室を手配してくれたので主人と息子はそこで待機となり、私はひとり分娩室の隣の部屋で陣痛に耐えながら時間をつぶしていた。出産のギリギリまで看護師さんが様子を見に来てくれてその時がきたら分娩室へいく、という流れは長男の時に分かっていたので、精神的には余裕があり、私の前に出産している妊婦さんの様子に聞き耳をたてることもできた。

そうこうしている内にいよいよ分娩室へ移動となり、ストレッチャーで運ばれてドアが開くと、狭い分娩室に待機していた15人ほどの看護師さんたちが一斉にこちらを見た。「あれ、人多くない?」と思ったが、こちらに発言する権利はなく、されるがまま分娩台に乗せられると、先生が私の周りをぐるりと取り囲むように看護師さんたちに指示し、「この妊婦さんは……」「ここに前回の出産の時に切開した跡が……」なんてことまで説明し

ていた。大勢の前で出産するという話は聞いていなかったが、陣痛もマックスになっていた私にとってはもうどうでもよく、次男をこの世に送り出すべく、大勢の前でいきんだ。多分すごい形相だったと思う。痛みで頭がぼんやりする中、一人の若い看護師さんが私の手を握りながら、ずっと励ましてくれていたことははっきり覚えている。

そして無事出産。赤ちゃんの元気な産声が聞こえ、ほっとして目を開けると、看護師さんが号泣していた。そして、嗚咽しながら私の手をより強く握ってきた。看護師さんの手の力強さを感じながら「命に国境はない」としみじみ思った。もちろん当たり前なことなのだが、頭ではなく心で理解した瞬間であった。

北京から日本に戻ってから8年になるが、今でもたび

たび自分が中国にいる夢を見る。地元のスーパーで買い物しているところや留学生宿舎でご飯を食べているようなたわいのないシーンだが、非常にリアルで懐かしい。やはり私にとっては20代、30代の人生の大切な時間を過ごした土地であり、第2の故郷という思いは強い。日本と中国との関係はたびたび難しい局面を迎え、色々な報道を目にすることもあるが、そのたび病院で感じた「命に国境はない」を思い出し、日本と中国の架け橋になれる道を日々模索している。

橘 高子 (たちばな こうこ)

大学で学んでいた中国語に惹かれ、卒業後の1997年に北京に留学。北京郵電大学で中国語を学ぶ。その後、大学で出会った主人と結婚し、主人の仕事に合わせて2012年7月まで北京に滞在。その間、2度の出産を経験。たまに中国語の翻訳をしつつ、また中国に行く日を夢見ている。

「私の中国物語」その④

上海日帰り旅のおかげで仲直りできた

高校生 山野井 咲耶

中国人のクラスメートを僕の何気ない政治的な発言で傷つけてしまったことがある。

僕は高校1年の冬頃に日中の外交関係に興味を持ち始め、高校2年の夏頃ひょんなことがきっかけで中国人のクラスメートと日中の政治問題を話すことになった。中国で生まれ育った彼女にとって、日本で生まれ育った僕が異なる政治思想を持っていたことがショックだったのか、泣き出してしまった。僕にはどうして泣き出してしまったのが理解できなかった。

僕の将来の夢は中国を始め様々な国と日本を橋渡しする存在となったり、世界の諸問題を解決することなのだが、そのためには多角的な視野を持っていることが大前提となる。当時の僕は保守からリベラルまで日本のあらゆる新聞を読み漁っていたため、てっきり「多角的な視点」を得た気でいた。しかし、この一件を通して、一見多様に見えるそれらの論調は国際社会では十把一絡げに扱われ得るのだ、と気づくことができた。

そこで僕は「もっと中国の視点で物事を見てみたい」

と思い始め、高校2年の冬休みに上海日帰り旅を計画した。僕にとって初めての中国旅行だったので、本当は何泊か滞在したかったのだが、18歳未満が上海のホテルに宿泊するためには大人の同伴が必要であったため、仕方なく日帰り旅にした。しかしそのお陰で、宿泊費が発生せず航空券など諸々の費用を含めて国内旅行と同じくらいの費用で上海に行くことができた。

上海に到着して一番驚いたことは、上海人の優しさである。中国では日本で使用されている地図アプリが利用できないため、中国の「百度地図」を使用する必要があった。しかし中国語が全くできなかった僕には難しすぎて使い方がさっぱりわからなかった。どうしようもなく、困っていたところ、一人の男性が僕に話かけてきた。彼は目の前にあるラーメン屋の店主で、道に迷っている高校生を見て、居ても立っても居られなかったのだという。僕が日本人だと分かると、すぐに彼のスマートフォンの翻訳アプリを開いて「どうしたの?」と聞いてくれた。まるで彼の老朋友であるかのように親切に接してくれた

のがとても嬉しかった。

日本で過ごしていると、一日に何度か「日本人の冷徹さ」を感じる場面がある。一方で中国人はとても人情味豊かな人々が多いように感じた。上海旅を通して彼女の気持ちが変わった気がした。中国人のクラスメートも恐らく感情が豊かだからこそ泣き出してしまったのかもしれない。「日本人だから」とか「中国人だから」などのように、一纏めに論じるのはあまり好きではないが、日本人が中国は「一番近くて、一番遠い国」としてしまうのは、このことが原因の一つではないだろうか。

上海から帰国後初めての登校日。夏に中国人のクラスメートと互いの政治意見が衝突して以来およそ半年間、口も利いておらず、とても気まずかった。僕が勇気を振り絞って、上海に行ったこと、そして相手の立場に立ってものを考えられていなかったことを謝りたい、そう伝えたところ彼女はなんと僕を許してくれた。しかも彼女も逆に感情的になってしまったことを謝ってくれた。その後、たくさん日帰り上海旅行での経験を話した。本当に素晴らしい（しかも異なるバックグラウンド持っている）友人を持つことができ、世界一の幸せ者だと思う。

それに加えて、彼女に僕の中国語の先生になってほしいと頼んだところ彼女は快く引き受けてくれたのだ。上海日帰り旅を通して人情味溢れる中国人と中国語で会話してみたいと思ったからだ。

中国語は拼音などがあり、日本人にとって発音が難しい言語の一つとされている。僕は英語以外の外国語を学んだことがないため、口の形から彼女から学んだ。始めは全く発音できなかったものの、老師のお陰で最近ではスマートフォンの音声入力ソフトでも認識してもらえるようになった。まだ初めて数カ月であるため初歩の初歩レベルだが、何か新しいことを身近な友達から学ぶこと、そして僕の発音をソフトが認識してくれることが楽しくて仕方ない。最近では「祝你生日快樂（誕生日おめでとう）」の発音練習しているのだが、なかなかこれが曲者で彼此一カ月ほど練習しているが、なかなか認識してくれない。新型コロナウイルスが落ち着いて、登校が再開された頃に彼女から直接教わりたいと思っている。

僕はこの上海への一人旅を通して、他国の立場に立って考えることの大切さや素晴らしさを学んだ。昨今新型コロナウイルスに関する報道において、保守・リベラル問わず国内のメディアでは中国批判の論調が目立ってきている。こんな時だからこそ一方の主義・主張だけでなく、互いの主張を聞いてみることも必要なのではないか。同一個世界なのだから。

山野井 咲耶（やまのい さくや）

2002年栃木県小山市生まれ。約15の国と地域に一人旅をし、各国の政策と社会問題に関心を抱く。2019年インドのマザーテレサ設立「死を待つ人の家」にてボランティア活動に従事。同年米国の歴史や外交関係のクイズ大会で入賞し、外務省のワシントンD.C.派遣プログラムへの参加権を授与。2020年ビジネスコンテストで日本代表に選出。同年世界大会で3位受賞。現在は文科省設立「#せかい部」の運営を務め、高校生の留学を促進する活動を行う。



味を忘れることができない思い出のラーメン